中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて
―キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査 2022 年―

紺谷　亮一　ノートルダム清心女子大学文学部教授
山口　雄治　岡山大学文明動態学研究所助教
フィクリ・クラックオウル　アンカラ大学言語・歴史・地理学部教授

Investigation towards the Understanding of the Chalcolithic Period in Central Anatolia: Excavations at the Central Trench, Kültepe, Turkey (2022)

KONTANI, Ryoichi　Professor, Faculty of Literature, Notre Dame Seishin University
YAMAGUCHI, Yuji　Assistant professor, Research Institute for the Dynamics of Civilizations, Okayama University
KULAKOĞLU, Fikri　Professor, Faculty of Languages, History and Geology, Ankara University

1. はじめに

キュルテペ遺跡は、2015 年に遺跡出土の約 25,000 枚の粘土板文書群がユネスコ世界記憶遺産に、2016 年に遺跡全体がユネスコ世界遺産暫定リストに登録された。このように多方面から注目される当遺跡の重要性をより内外に示す為、発掘調査隊長であるフィクリ・クラックオウル教授が奔走し、昨年、調査隊宿舎内にヴィジターセンターがオープンした。また、遺跡から約 4 km 南東部に「キュルテペ博物館(仮称)」が新たに建設中であり、筆者らも展示内容について監修することになっている。

このような状況下、我々は 2015 年からキュルテペ遺跡北辺、西辺に設定したトレンチの発掘調査において、前期青銅器時代以前の文化編年構築を目的としてきた。だが、さまざまな障害に出会い確実な銅石器時代層を発見するには至らなかった。そこで 2021 年度には、テペ中央部のワルシャマ宮殿南部直下に新たに中央トレンチを設け(**図 1**)、ついにここで後期銅石器時代の文化層を発見した。

中央アナトリアにおける銅石器時代編年研究は、80 年以上前に行われたアリシャル・ホユック遺跡の調査以降、ほぼ進展がない状態である。さらに、西アジアにおける都市文明の起源という重要テーマを考慮した場合、農耕を基盤とした南北メソポタミアとの比較が不可欠である。では、必ずしも穀倉地帯に立地しないキュルテペ遺跡が都市化した要因はどこに求められるのか。

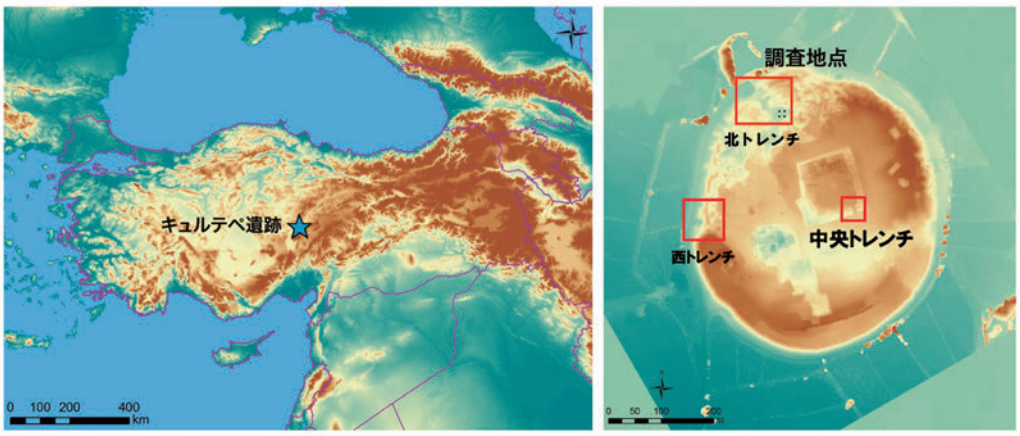

図 1　キュルテペ遺跡の位置と遺跡地形測量図・調査地点(左は SRTM3 データを使用して作成、右の地形測量図は早川祐弋氏作成)

図2　調査区（左）と Room1（右）

2022年度は、2022年8月5日～9月14日まで発掘調査を行った。中央トレンチを部分的に拡張すると共に、後述するがジグザグ大型建築址の第1床面下を掘削した。さらに、発掘区北西部に深掘坑を設定し、地表下約6mまで調査した。

2. ジグザグ大型建築址の3つの床面

2022年度は、アッシリア・コロニー時代後期のワルシャマ宮殿と呼ばれる大規模建築址最南端部に設定した中央トレンチを継続して調査した。ワルシャマ宮殿が位置するテル中央部は、地形的に周辺部よりもかなり高くなっており、アンカラ大学が主として調査を行っているテル南西部トレンチ（前期青銅器時代後半の大規模建築址が検出）との比高差は約7mである。しかしながら、大部分はワルシャマ宮殿下に埋もれている。また、ワルシャマ宮殿も含めテル中央部には、かつてB. フロズニー（Hrozný）が強引に掘削したことによって多くの建築層が破壊されている。

当トレンチでは、東西方向に伸びるジグザグ大型建築址が確認されている。ここでは、特にRoom1について言及する（**図2**）。この部屋は、日干しレンガ（サイズも大きい）によって構築されている。壁体の幅は1.5m以上を測り、高さは最も高い所で床面から3mまで残存している。また、壁体内部には丁寧にプラスターが張られている。現時点において3枚の床面が確認でき、それを裏付けるように部屋の西側において各床面に伴うピボットが存在する。

出土遺物においては、一般住居と比べて獣骨の出土が極端に少ない点が特徴として挙げられる。また興味深いのは、第3床面に伴う遺物として、部屋隅（南西・北東）に大型の甕、壺が埋納されていたことである。これらの中には、入れ子状態でそれぞれ壺、小型鉢が出土した（**図3、4**）。また、南西部で馬蹄形をした幅2mを超える炉が確認された。この炉に関する放射性炭素年代測定データは3335～3026 cal BC（2σ）を示す。

3. ジグザグ大型建築址に伴う小部屋

ジグザグ大型建築址の周辺（北・南・東側）からは、日干しレンガ壁からなる小部屋が確認された。東側の小部屋では埋納された大型甕、把手付きカップ、覆土内で5本まとまった状態のフリント製石刃（カナアン石刃）などが出土した（**図5**）。小部屋の配置は、Room1を中心に規則的に配置されているように見える。とするならば、上述した事も含めてジグザグ大型建築址の性格は、一般住居とはかなりかけ離れているのではないかと考えられる。

4. 北西部深掘坑

深掘坑は、調査区北西部に約4×4mの区画を設けて掘削した。当区画では、ジグザグ大型建築址よりもさらに古い文化層を確認することを目的とした。明確な建築址は確認できていない。狭い区画での調査であったが出土土器に大きな変化があった。ジグザグ大

図 3　Room1 南西部出土土器

図 4　Room1 北東部出土土器

図 5　Room1 東小部屋出土土器・石器

型建築址に共伴する土器のほとんどは黒色磨研土器である。これに対し、下層にいくにしたがって赤色磨研土器の割合が増える傾向にある。今年度の最深部で出土した赤色磨研土器群付近から採取された炭化物の放射性炭素年代測定データは、3768～3646 cal BC(2σ)であった。

5. 今後に向けて

現段階で言えることは、キュルテペ遺跡において、最も古い文化層に到達しているということである。ジグザグプランを呈する大型建築址は、かなり特殊な性格をもっている可能性があると考えられる。さらに、北西部での深掘坑の成果を基にするならば、キュルテペ遺跡には前期銅石器時代に属する文化層の存在が確実視できるようになった。今後の課題は、調査区を拡張しジグザグ大型建築址の全体像を明らかにすること、および深掘坑をさらに深く掘削し、後期銅石器時代以前の様相を明らかにすることである。来年度の発掘が今から楽しみである。

本研究は、JSPS 科研費 JP20K01097、MEXT 科研費 JP21H00009、公益財団法人三菱財団人文科学研究助成、公益財団法人髙梨学術奨励基金、RIDC2022 年度共同研究の助成を受けたものである。

■参考文献

・Kulakoğlu, F., R. Kontani, A. Uesugi, Y. Yamaguchi, K. Shimogama, M. Semmoto 2020 Preliminary report of excavations in the northern sector of Kültepe 2015–2017. *Subartu* 45: 9–88.
・紺谷亮一　2020「趣旨説明：アナトリアにおけるメガ・シティの起源」『日本西アジア考古学会第 25 回大会要旨集』9–10 頁　日本西アジア考古学会。(http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2020/10/25thJSWAA_abstracts.pdf)
・紺谷亮一・F. クラックオウル　2022「キュルテペ遺跡の都市性とその評価」『西アジア考古学』第 23 号　137–144 頁　日本西アジア考古学会。
・紺谷亮一・山口雄治・下釜和也・F. クラックオウル　2020「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて―キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査 2019 年―」『第 27 回西アジア発掘調査報告会報告集』49–51 頁　日本西アジア考古学会。
・紺谷亮一・山口雄治・F. クラックオウル　2021「中央アナトリアにおける銅石器時代解明に向けて―キュルテペ遺跡北トレンチ、西トレンチ発掘調査(2020 年)―」『第 28 回西アジア発掘調査報告会報告集』59–61 頁　日本西アジア考古学会。
・紺谷亮一・山口雄治・F. クラックオウル　2022「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて―キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査 2021 年―」『第 29 回西アジア発掘調査報告会報告集』97–99 頁　日本西アジア考古学会。